様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　4 月　30 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008～2009
課題番号：20830050
研究課題名（和文）　自閉症スペクトラム児とその養育者への対人関係構築のための支援プログラムの有効性の検討

研究課題名（英文）　Study on the effectiveness of intervention focusing on interpersonal relationship to autism spectrum child and caregiver

研究代表者
酒井　佐枝子（SAKAI SAEKO）
大阪大学・連合小児発達学研究科・講師
研究者番号：20456924

研究成果の概要（和文）：
自閉症児を持つ養育者への支援のあり方を検討することを目的に調査研究を行った。養育者の認識する子どもの特性が実際の診断より過剰である場合、問題行動のみに注目し、見通しをもった対応が減る傾向にあることから、支援では子どもの行動に関する共通認識を持った上で具体的な対応を提示する必要性が示唆された。また、養育者が受講するコミュニケーションや社会性促進を目的としたプログラムは、非言語的行動や情緒面への理解を深めることから有効であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study was to delineate what is necessary in supporting the caregivers who have children with autism.　Caregivers who perceive their child' s trait more severely tend to pay attention to problematic behaviors and not able to perceive what is necessary for future.　In order for appropriate support, professional and caregiver both need to stand on the same understanding line of the child's trait first to discuss what could be done.　Programs that focus on facilitating children's social and communication skills to caregivers would shed light to the importance of referring to nonverbal behaviors and emotional signals.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,140,000	342,000	1,482,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,340,000	702,000	3,042,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：自閉症スペクトラム、関係性、養育者

１．研究開始当初の背景

発達障がい児・者(ASD 児とする)が、社会で十全に生活できるための療育をはじめとする生活支援の充実が求められている。療育の展開における理論的背景も 20 世紀前半と比較すると飛躍的な変化を遂げ、ASD 児の特性への理解の深まり、養育者への具体的な療育方法が多数提示されてきた。それらのアプ

ローチの多くは、ASD 児の認知的側面を考慮に入れ、彼らの強みを活かした方法を提示していくことに焦点をあてたものといえる。しかし、コミュニケーションおよび社会性の障害こそ、ASD の中心課題としてあげられる。学習や生活しやすい環境を整備するための構造化やソーシャルスキルなど認知機能へのアプローチとともに、他者との関係づくりなど社会性の獲得、コミュニケーションに関する思考の構築に焦点を当て習得させることは、成人期以降の社会生活を営む上でも重要といえ、その後のよりよい対人関係の維持に不可欠なことといえる。しかし、こうした対人関係の構築への体系立てた支援を行うためにどのようなアプローチが必要であるかの整理、そして各種プログラムに関する客観的評価はこれまでなされてこなかった背景がある。

２．研究の目的

ASD 児のコミュニケーションおよび社会性を構築していく上では、養育者の果たす役割が大きいといえる。このことを考慮し、本研究では以下２点について明らかにすることを目的に調査研究を行った。

(1)研究１：養育者の内的特性が ASD 児の特性への認知にどのような影響を及ぼすかを検討する。

(2)研究２：対人関係を構築していくことを目的としたプログラムを体験することにより、ASD 児の行動と親子の相互作用にどのような変化が見られるかを検討する。

３．研究の方法

(1)研究１

①対象：大学附属病院「親と子の発達相談」事業のうち、入院事業に参加する養育者と ASD 児 38 名うち記入漏れなどがあった対象者を除いた。有効回答 32 組を分析の対象とした。

②内容：子どもの特性を把握するために Autism Diagnosis Observation Schedule-Generic (ADOS-G)、Autism Diagnosis Inventory- Revised (ADI-R) を用いた。また養育者の内的特性はエゴグラム(TEG)、育児ストレス尺度(KGPSI)を用いた。また対人関係スタイルを測定する尺度(ECR-GO)、自己効力感尺度(SEFF)については協力が得られた養育者のみを分析対象とした。自由記載は問診票内容から「子どものことで困っていること」を分析対象とした。

③分析：養育者の子ども特性と専門職による自閉症診断との差を測定するために、ADI-R と ADOS の下位カテゴリを比較検討した。すなわち ADI-R における「相互的対人関係の質的異常」と ADOS における「社会的相互交渉の質的異常」、ADI-R における「意志伝達の質的異常」と ADOS における「意思伝達」について、それぞれのカットオフ得点からの差異をもとに、各下位カテゴリの問題に対する養育者の認識を 3 群に分類した。養育者が各下位カテゴリの問題を診断よりも過剰に問題ととらえている場合、ADI-R 上での得点が上がることから、ADOS との差異が大きくなる。こうした傾向がみられた群は「過剰群」とした。また、ADOS と同様に問題を認識している群を「妥当群」、過小に問題をとらえている群を「過小群」とした。

また、TEG は自我状態の機能モデルに沿って得点化し、KGPSI は野沢(1988、1989)の因子分析結果に基づき、6 因子の評定平均値を算出し分析に用いた。ECR-GO、SEFF は酒井・加藤(2007)にならい各評定平均値を算出し分析に用いた。自由記載内容については、PASW Text Analytics for Surveys 3.0.1J を用いた質的分析を試みた。

（２）研究２

①諸外国において開発されている対人関係構築に焦点を当てたプログラムに関する文献検討を行った。

②対人関係発達指導法(RDI)の手法を取り入れた養育者面接により、面接前後における親子相互作用の変化の検討を行った。

a) 対象:「親と子の発達相談外来」を受診し、本プログラム施行に同意した家族 2 組。

b) 内容：プログラム開始前に親子相互場面を要求される課題を実施した。その後プログラムでは、養育者 2 名に対して、ASD 児の社会性とコミュニケ―ションを促進するための関わり面接を行った。加えて、宿題として家庭での親子のやりとり場面を録画してもらい、プログラム中にふりかえった。一定期間後に再度プログラム開始前と同じ課題を実施し、親子の相互作用の測定を行った。

c) 分析：プログラム施行前後における課題中の親子の相互作用の変化を分析対象とした。

４．研究成果

（１）研究１

①養育者の子どもの特性に対する認識の差異について

養育者の子どもの特性に対する認識として「過剰群」は 13 ケース、「過小群」は 4 ケース、「妥当群」は 15 ケースであった。

「過剰群」は、自閉症スペクトラムと判断されたケースにおいて最も多くみられたのに対して、「過小群」は自閉症と判断されたケースにおいて最も多くみられた。

表１　養育者の認識と ADOS 診断について

			ADOS診断			計
			自閉症	自閉症ｽﾍﾟｸﾄﾗﾑ	自閉症ではない	
養育者認識３群	妥当群	度数	11	4	0	15
		養育者認識３群 の %	73.3%	26.7%	.0%	100.0%
		ADOS診断 の %	68.8%	28.6%	.0%	46.9%
	過剰群	度数	2	9	2	13
		養育者認識３群 の %	15.4%	69.2%	15.4%	100.0%
		ADOS診断 の %	12.5%	64.3%	100.0%	40.6%
	過小群	度数	3	1	0	4
		養育者認識３群 の %	75.0%	25.0%	.0%	100.0%
		ADOS診断 の %	18.8%	7.1%	.0%	12.5%
合計		度数	16	14	2	32
		養育者認識３群 の %	50.0%	43.8%	6.3%	100.0%
		ADOS診断 の %	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

②養育者の認識と KGPSI と TEG の関連について

養育者の認識 3 群による KGPSI と TEG の下位因子の得点に差がみられるかを検討したが得点に違いはみられなかった。

③子どもに関する養育者の訴え

子どもの行動について「困ったこと」に関する自由記載内容について、養育者認識 3 群による違いを検討した。「コミュニケーションが難しい」「上手にできない」「落ち着きなくウロウロする」など言葉の組み合わせとして＜否定的表現＞の使用率を検討した結果、妥当群 73.33％、過剰群 61.54％、過小群 50.00％といずれの群においても高い使用率となっていた。

次に具体的にどのような内容についての記載がみられたか検討したところ、養育者認識 3 群における違いとして顕著だったのが、「注意」という言葉の使用に関してであった。妥当群ではこの言葉の使用はみられず、過剰群と過小群のみでみられた。具体的には過剰群・過小群において、問題となる行動への注意が届かない、あるいは注意すると叩く・怒りだすなど、注意した結果子どものさらなる行動が発生するという文脈での記載、注意力がないといった子どもの特性に関する記載であった。それに対して妥当群における記載では、「注意」という言葉がみられなかったものの、「する」「行動」「言葉」の使用が最も多く、具体的内容をみると子どもがどのような行動をとるかに関する具体的記載のみにとどまる傾向がみられた。

また、幼稚園、学校、集団生活など子どもの通園・通学に関連する語が用いられている者のうち養育者認識による違いを検討した結果(表 2)、問題行動に関する記載はどの群においてもみられた。妥当群にのみ特徴的だったのは、現在あるいは将来の就学に向け学校への働きかけや対応についての記載がある点であった。

表 2　通園、通学に関連する語を用いた人の記述内容の特徴

記述内容の特徴	妥当群（4名）	過剰群（5名）	過小群（3名）	計
全般的な不安	0	3	1	4
問題行動	2	2	2	6
現在・将来に向けての対応	4	0	0	4
計	6	5	3	14

④考察

本研究では養育者の自閉性障害特性に対する認識が専門職のそれと比較してどの程度差があるかに応じて、養育者認識 3 群に分類した。そして専門職の判断と同程度に子どもの特性を認識している妥当群が最も多かった子どもの診断は自閉症であった。この妥当群では困ったことの記載の特徴として、不安や問題行動に関する記載だけでなく将来的な対応に関しても言及がみられた。一方、専門職の判断よりも重篤に障害特性を認識している過剰群は、自閉症スペクトラムと診断された者に最も多く、問題行動に対する訴えおよび不安を記載する傾向が高かった。しかしいずれの群においても KGPSI や TEG に特徴的な点はみられなかった。

日常生活の中で養育者と子どもとの間で繰り広げられるやりとりの過程は、養育者側からの一方的な働きかけのみで成立しているわけではなく、養育者と子どもそれぞれの行動が相互に作用し合うことにより進展していくものといえる。つまり、子どもからの発信があることも重要である(Kumar, 1997)。しかし、自閉症児にみられるコミュニケーションや社会性の問題が母親のストレスを増大させる要因としてあげられ（蓬郷・中塚・藤居、1987)、養育者にとって自閉症児の表出するサインがわかりにくいものである場合、こうした相互作用を促進しない可能性は否定できない。こうした子どものサインの分かりにくさやその結果のやりとりのしにくさ、対応のできなさといった困り感が、子どもの特性そのものを過剰に問題ととらえる傾向につながっていることが示唆された。

専門職の判断で自閉症ではないと判断された 2 名はいずれも過剰群に該当した。これら自閉症ではないと判断された 2 名の子どもは、いずれも社会性やコミュニケーションにおける課題よりも、こだわりや日常生活内における切りかえのできなさから養育者が関わりに困っていると認識しているケースであった。新美・植村(1980)は、養育者のストレスを構成する下位尺度として、発達障害児の問題行動そのものを抽出しており、平均 4.6 歳の自閉症児では、知的や言語障害など他の障害を持つ子ども、定型発達児と比較して、養育者の指示に従う割合が少なく、また養育者の指示を無視したり、その場を離れるといった行動をとる傾向が高いことが示されている(Lemanek, Stone, & Fishel, 1993)。本研究では KGPSI における養育態度で有意な差はみられず、また養育者のストレスを測定

していないことから断定することはできないものの、こうしたことを鑑みると、子どものこだわりや常同行動などへの対応がわからないことにより、子どもの同じ行動や特性に対して養育者が過剰にとらえることにつながっている可能性がうかがえる。

こうした結果をふまえると、養育者への支援を考える際には養育者の不安や問題行動への訴えに対してそれが客観的評価と一致するかを検討した上で具体的な対応の仕方を伝えるために、子どもの行動を専門職と一緒に分析することから始めることが重要といえる。

養育者の訴えには、子どもの特性が顕著ではないことにより、周囲から理解されにくいことからくるストレスや子育て困難感もみられる。過剰群に自閉症スペクトラムと判断された子どもが最も多かったのも、こうした点に由来することが考えられる。養育者自身が抱える困難感や不安は現実にあり、こうした訴えに真摯に耳を傾けることは大前提であるが、具体的支援を提供する際には子どもの行動に対する共通理解を得ることが必要といえる。養育者と専門職の認識の間にズレがある可能性を考慮すると、子どもの行動を客観的に分析するためのツールとして、ホームビデオやビデオ録画を積極的に導入することは意義あることと考えられる。こうした具体的な視覚教材を用い、共通の認識を土台とした話し合いにより、養育者自身が実践可能な対応方法を専門職と一緒に話し合い、抽出できる可能性が増えることが期待される。

（２）研究２

①対人関係に焦点をあてたプログラムに関する文献検討の結果と考察

自閉症児のコミュニケーションを促進させ、社会性を育むためのアプローチが近年注目を集めている。代表的なプログラムとして、自閉症児への対人関係発達指導法(Relationship Development Intervention: RDI; Gutstein, 2009)やDIR/Floortime™ (D: Developmental、I: Individual-differences、R: Relationship-based　発達段階と個人差を考慮に入れた、関係性に基づいたアプローチ ; Greenspan& Wieder, 2006/2009) 、Son-Rise Program® (Kaufman, 1995)などがある。いずれのプログラムにおいても養育者の果たす役割が注目され、養育者との関係を通して自閉症児がコミュニケーション能力を広げていくことを強調する。RDI の開発者であるGutstein(2009)は、良き導き役としての養育者の存在を重視し、特に定型発達の子どもが対人関係の中で無意識に獲得していくスキルを、養育者の意識的なかかわりを通してやり直すチャンスを提供する点を強調する。したがって子どもの対人関係における発達レベルに応じた適切なリード(働きかけ)の仕方を工夫することが求められる。

一方、DIR/Floortime™では、子どもの示すサインに敏感であることを求める。子どもの感情や要求をよく観察し、子どものリードを尊重して感情、社会、知能、教育面における個別目標を達成できるよう関わり方を工夫する。その一手段としてFloortime™があり、家庭における子どもとのやりとりの時間を通して、子どもの自然な興味に沿いながら、少しハードルの高いレベルを習得できるような挑戦の機会を与える。

いずれのプログラムでも養育者の敏感性や子どもの反応に的確に応答するなど、養育者が子どもに開かれていることが求められる。子どももまた、養育者をそのような対象として利用できるということを実感できるだけの相互作用が蓄積されることを必要としている。そのためには、社会性の育みの基礎として養育者が発信するやりとりの質をASD 児ひとりひとりの特性に合わせて工夫することが求められ、これらのプログラムはこうしたことを目指した取り組みに焦点をあてていることが明らかとなった。

②プログラム施行に関する結果と考察

a)　結果

・対象となった家族２組の対象児について：

	対象児 A(5：3)	対象児 B(6：11)
ADOS 結果	自閉症スペクトラム	自閉症
	意思伝達＝自閉症カットオフ得点 社会的相互交渉＝自閉症カットオフ得点 意思伝達+社会的相互交渉＞自閉症スペクトラムカットオフ得点	意思伝達＝自閉症カットオフ得点 社会的相互交渉＞自閉症カットオフ得点 意思伝達+社会的相互交渉＞自閉症カットオフ得点

・養育者特性について：

対象となった養育者に対しての研究１と同様の質問紙調査を実施した結果、ECR-GO 各下位尺度の得点について、子育て中の養育者全般に対する調査研究における得点と比較すると、両養育者ともに関係不安において 1SD 以上高い傾向(養育者 B においては 2SD 以上高い傾向)がみられた。また養育者 B では、自己効力感尺度：自己効力感得点が子育て養育者群の得点よりも 1SD 以上低い結果となった。次に虐待傾向尺度では養育者 A において体罰叱責傾向が 2SD 以上、同一視的自責傾向が 1SD 以上高い結果となった。

KGPSI について子育て養育者群の得点と比較検討した結果、養育者 A においては、「親としての自信のなさ」「夫の非協力」「子どもとのbond」において1SD以上高い得点となり、「子どもとの bond の弱さ」では 2SD 以上高い結果となった。養育者Bについては「親役割による欲求不満」において 1SD 以上高い得

点となった。

・課題場面の分析：それぞれの家族の特性と課題が異なることから家族 A に対しては co-regulation と co-ordination に焦点をあてた課題を通した分析、家族 B に対しては collaboration に焦点をあてた課題をプログラム開始前後に実施し分析した。相互作用は母親と対象児との間のものを分析対象とした。

【家族 A 課題分析】

太鼓を用いた課題についてプログラム前後の相互作用の変化を、発語、視線の交換、ジェスチャーの出現数を測定することを通して分析した。課題は、本プログラム開始前および教育セッション終了時(15 回後)に同じ内容の課題を実施した。その結果、子どもの発話に関しては開始前の特徴として、母親に言葉で説明しようとしても自分の意図が理解されず 1 分 21 秒後に物を投げるという形で表現した。これに対して 15 回後に同様の葛藤場面に遭遇したものの、「ここにあたって」「こうやって」と身ぶりを交えながら説明をし、1 分 48 秒にわたるやりとりの結果、最終的には「もういい」ということで物を投げることなく会話が終了した。プログラム前後ともに母親の向ける目線は、発話とともに共通してみられたものの、15 回後では自分の考えていることをジェスチャーを交えながら言葉で説明をすることにより問題行動としての表出がみられなかった。

【家族 B 課題分析】

積み木とパズルを用いた課題についてプログラム前後での分析を行った。プログラム開始前における親子のやりとり場面では発語が中心のやりとりであり、視線の交換は一切みられなかった。課題が完成した際に、児 B は母親とは反対の方向を向き、表情には笑みを浮かべ、手を叩くしぐさはみられたものの、母親と完成を喜ぶという様子はみられなかった。母親が「一緒に喜んでください」という言葉に促され、拍手「(大声で)イエーイ」「うるさい？」がみられた。その際、視線は 1 回母親に向けられたが、視線が合うことはなかった。母親は言葉での指示が多く、指差しを伴うことは少なく、ジェスチャーはピースを「くるくるって回すのよ」の 1 回のみであった。

その後、教育セッション終了時(9 回後)の課題場面の分析を同様に行ったところ、母親と児 B との相互作用の質に変化がみられた。母親は課題の完成イメージをあらかじめ児 B に伝え、共通理解が得られているかジェスチャーを交えながら児 B に確認する行動が出現した。これに対して児 B は母親を見ながらうなずき、一緒に課題に取り組み始める行動が新たに出現した。さらに児 B は、一つ一つの動作の後に母親に視線を向け、作業の工程を確認するという行動がみられ不安を示した際には母親がジェスチャーで示し「何で？こわい？」と伝えることで、児 B は体全体を使って怖いことを表現し、それによって作業の仕方を母親が変更するといった行動がみられた。

b) 考察

プログラム開始前では両母親ともに「言葉」での指示が多く、両対象児ともに言葉で反応するといったこと特徴がみられた。また対象児はやりとりをしている他者の非言語的な行動などその他の情報を参照していないことから、対象児自身が他者から理解されない状況になると、例えば対象児 A の場合にはかんしゃくをおこし、太鼓のバチを投げるといった行動に移行した。一方、プログラム開始後における相互作用では、言葉で説明することには変わりないものの、ジェスチャーを用い状況を説明しようとする努力を継続することで、物を投げるという行為に至ることはなかった。

プログラムで養育者と話し合いを行う際に重視する点として、子どものコミュニケーションや社会性の発達を促進する際に、養育者が子どもにとって良きガイドとして機能する必要があること、そしてさまざまな技法の背後にある基礎理論や原理を理解していることが求められる。本プログラムにおける教育セッションはこうした点を日常生活でのやりとりを実践しながら学ぶことを目的とした時期である。常に変化している、複雑な、部分的にしか情報として明らかになっていないこの世の中で、子どもが状況を把握し、必要で適切な行動をとることができるように導くための土台作りを行う。その中では言語による相互作用だけでなく、非言語的コミュニケーションに対して子ども自身が気づくための関わりを行うこととなる。日常生活の中で子どもがこうしたメッセージを参照することを意味あることとして認識できるような関わり方を養育者が行うことができるようにすることが宿題の意図するところといえる。視覚的媒体を用いた話し合いを通して、養育者自身が日ごろの子どもとのやりとりをふりかえる機会を持ち、言葉が優位となる相互作用を意識的に減らすといったことが行われたと考えられる。そしてその結果、課題における相互作用の変化として、子どもが相互作用を行っている他者の言葉以外の行動(非言語的行動)も参照することでやりとりを進めることができ、またかんしゃくを別の行動におきかえることができたものと考えられる。

養育者 A と養育者 B ではともに ECR-GO に

おける関係不安が高い傾向にあったものの、その他の特性についての共通した特徴はなかった。そのような中、プログラムを実施することを通して、子どもへの関わり行動には同様の非言語的コミュニケーション行動が増える傾向がみられ、養育者の養育態度に関する内的特性によるプログラム内容の習得および相互作用の変化の違いは確認されなかった。

本プログラムでは、子どもが、現実世界・生活の中での自分の能力を高めることに結びつく発見ができるように導く（場面と役割の設定と調整・統制）ことが、養育者のガイドとしての役割と責任ととらえるが、このことを達成できるように段階的な課題を面接の中では設定している。本研究ではその導入の段階である教育セッションのみについて相互作用の変化を検討したが、養育者の子どもへの関わりと子ども自身の行動に変化が認められたことから、今後こうした手法の面接を継続することによって、子どもの社会性やコミュニケーションの発達を促すことができるものと考えられる。

（３）まとめと今後の課題

本研究により、養育者の特性に関わらず、子どもの特性に関する養育者認識を把握し、その上で支援を提供することの重要性が示唆された。これは、子どもの行動や特性に関する客観的な共通認識を援助職との間で構築することの必要性を示しており、こうした土台に基づいて実践可能な対応方法を検討することが求められる。また子どもの社会性やコミュニケーションを促進する上では、視覚的教材を導入してやりとりを分析する面接を通して、相互交流における非言語的コミュニケーションの重要性の認識と具体的な子どもとのやりとりの変化が示された。

本研究では養育者の内的特性による子どもの特性認知の影響は確認されなかった。今後、被験者数を蓄積していくことにより、養育者認識が過剰になる背景を検討することが必要である。また、研究２では２家族への試行であり、また限定された面接期間であったことから、その後の継続した効果を判断することはできなかった。今後、対人関係構築を目指した面接を継続することによる子どもの社会性とコミュニケーション能力の向上がみられるかについて継続したデータ蓄積が求められる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

酒井佐枝子　2010　対人関係の構築を目指した支援の模索、子どものこころと脳の発達：1、印刷中、査読無.

〔学会発表〕（計　１件）

酒井佐枝子（代表）　発達障害児の短期集中入院における心理的支援の試み 1：対象児と養育者の特性理解と関係調整に注目して、第52 回日本小児神経学会　2010 年 5 月 21 日、福岡.

６．研究組織

(1)研究代表者

酒井　佐枝子（SAKAI　SAEKO）
大阪大学・連合小児発達学研究科・講師
研究者番号：20456924

(2)研究分担者

該当なし

(3)連携研究者

該当なし